

〔論 文〕

公共図書館活動の開拓者 ジェームズ・ダフ・ブラウン ——イギリス図書館思想の研究——

藤 野 寛 之

I はじめに

1850年にイギリスの下院議会で成立した公共図書館設立のための法的根拠となる「公共図書館法 (Public Libraries Act)」は、同時期に成立し広がりを見せたアメリカのニューイングランド諸州の「公共図書館法」ならびにそれに基づく公共図書館成立事情とは異なり、その後の1870年代の後期に至るまでさしたる発展を見なかった。「公共図書館法」を採択して市民のための図書館を創設した都市は、1855年までにはサルフォート (1850)、ウィンチェスター (1851)、マンチェスターとオックスフォードとリヴァプール (1852)、ポルトン (1853)、ケンブリッジ (1855) で、1860年までに13都市、1870年までにさらに15都市が加わっていた¹⁾。こうした「任意法」採択の低調ぶりにはいくつかの原因があった。1850年に成立した「公共図書館法」では人口が1万に達しない都市にはその権限がなく、さらに、図書館という「器」はできていても、蔵書を購入する手だてを決めていなかった。1820年代の後半からは小さな町にも「職工講習所」²⁾のコレクションはあったものの、それらは会員制の図書館であり、蔵書も数百冊程度の規模であった。オックスフォードで成立した「公共図書館」には、理事たちからの寄贈図書以外にはコレクションがほとんどなかった。1842年以降には書籍業者チャールズ・ミューデイ (Charles Edward Mudie, 1818-1890) の「選定図書館 (Select Library)」と銘打った「貸本屋」から借りられる本、および、

17・18世紀に最盛期を迎えた「コーヒーハウス (Coffeehouse)」³⁾での新聞・雑誌が市民の読書を受け持っていた。イギリスでのこのような状況は、1832年の「改革法案 (Reform Act)」と銘打った選挙法改正により中産階級の市民が社会改革に参加するようになってからようやく変化しはじめた。アメリカで図書館員の大会が開催されて、図書館協会 (Library Association) が発足した1876年、すでにアメリカでは公共図書館の数が348館となっており⁴⁾、同年に図書館協会の機関誌『ライブラリー・ジャーナル (*Library Journal*)』が発行されていたのに対し、イギリスの図書館員たちがこれに刺激され、ロンドンで大会を開いて「(イギリス) 図書館協会」を成立させたのは1877年10月であった。設立当初、機関誌も独自には持たず、アメリカの『ライブラリー・ジャーナル』誌に合流していた⁵⁾。こうした展開の「遅れ」に気づき、公共図書館活動を独自路線のうえに成立させ、活動を開花させていたのは、主としてロンドン各地区の若き図書館長たちであり、その指導的存在がジェームズ・ダフ・ブラウン (James Duff Brown, 1862-1914) であった。図書館思想史の再検討を目的とする本稿では、公共図書館活動の萌芽期に活躍したブラウンの経歴・図書館活動を取りあげ、彼が図書館につき何を考え、何を試みたかを総括する。

II 修行時代

ジェームズ・ダフ・ブラウンは、1862年11月

6日にスコットランドの首都エディンバラで、アバディーン出身の貧しい簿記係のジェームズ・ブラウン (James Brown) の家庭の7人兄弟姉妹の次男に生まれた。家族に伝わる「伝説」では、一家はスコットランド高地の義賊で作家スコット (Walter Scott, 1771-1832) の小説のモデル、「ロブ・ロイ」・マッグレガー (Rob Roy Macgregor) の縁者であったとされていた⁶⁾。母は信仰心に厚く、姉マーガレットはピアニスト・声楽家、弟は視覚障がいを患っていた⁷⁾。スコットランド教会のノーマル・スクールで教育を受けた後、グラスゴーの書店で徒弟となる。しかし店主は酒飲みであったため、ブラウンは転職を考えるようになった。その後、創設されたばかりの同地区のミッチェル図書館に応募して、運良く採用される。1888年の「図書館大会」はグラスゴーで開催され、ブラウンはここで「目録」についての論考を発表し図書館界に名を知られた。スコットランド人は、サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) の『自助論 (Self-Help)』が示すとおり、努力で自分の途を開拓してゆく伝統に恵まれており、ブラウンもその一人であったが⁸⁾、それは、イングランドに対する秘かな対抗心と前世紀の「スコットランド・ルネッサンス」⁹⁾の成功に裏打ちされていた。折からにロンドンのクラーケンウェル地区に公共図書館が新設され、ブラウンは同年に図書館員に応募して採用された。

Ⅲ 「クラーケンウェル公共図書館」時代

この図書館での初任給は年額150ポンドであったが¹⁰⁾、彼は熱心に働いた。仕事としては、詳細に至るまでの図書館実務の習得であった。ブラウンが手本としていたのは1851年よりマンチェスターの初代公共図書館長を務めたエドワード・エドワーズ (Edward Edwards, 1812-1886) であった¹¹⁾。エドワーズは隔々に至るまでの図書館の仕事のすべてに通じており、これがブラウンにとっての模範であった。女性の助

手職員の採用にも彼は熱心に取り組んだ。当時としては前例のないことであったが、理解のある理事は彼に賛成した。1890年にブラウンは、図書館協会の名誉書記ジョン・マッカリスター (John Y. W. MacAlister, 1856-1925) から協会の機関誌『図書館 (*The Library*)』に文章を寄稿するよう依頼された。これもまたブラウンの実績につながった。

ブラウンがクラーケンウェル公共図書館で重視していたのは、次の二つ、「図書館の備品からサービス活動に至る仕事のすべてに対し業務に精通すること¹²⁾」、「参考図書 の 編 纂 に 余 暇 の 時 間 を 割 く こ と」であった。彼の場合には音楽関連の人名事典の編纂を中心に、クラーケンウェル時代以前の『音楽家伝記事典 (*Biographical Dictionary of Musicians*)』(1886)、『大作曲家の私生活』(1892)¹³⁾、『音楽図書館形成のための案内 (*Guide to the Formation of a Music Library*)』(1893)、『イギリス音楽書誌 (*British Musical Biography*)』(1897)、『世界の国々の特色ある歌曲と舞踊 (*Characteristic Songs and Dances of All Nations*)』(1901)などを編纂、その何作かは音楽関連を扱うグローヴの事典でも参照されていた。

Ⅳ 「開架制」論争

クラーケンウェル時代のブラウンのさらなる大きな業績は「開架制 (Open-Access)」図書館の実現であった。1893年にブラウンはアメリカ図書館協会のシカゴ大会に出席し、アメリカ公共図書館の多くが利用者の「自由接架」を許している姿を見て感激し、帰国して直ちに自館で「開架制」を実施しはじめた。1894年5月1日、クラーケンウェル公共図書館はイギリス最初の開架制図書館となった¹⁴⁾。しかし、それは容易に実現したわけではない。反対派も精力的に阻止活動を行っていた。反対の論拠は、貴重な図書が失われること、棚が整頓できないことであり、そのことによって「利用者=市民」からの信頼が失われるであろうというものであった。

反対派の急先鋒は、貸出図書の出納記録器である「表示板」の設置により図書の紛失を防ぐことができると論ずる「表示板」の発明者で、自らその生産工場と特許を持っていた図書館長アルフレッド・コトグリーヴ(Alfred Cotgreave, 1849-1911)であった¹⁵⁾。ブラウンの味方は、理想に燃えた若き図書館長たちであった。彼らは保守的な図書館協会の理事会と対立せざるをえなかった。しかし、事態は時間の経過とともに解決の方向をたどり、公共図書館の館内は改善されていった。利用者にとっての「開架制」の使いやすさが次第に理解されるようになっていったのである。紛失図書も予想したほどに多くはなかった¹⁶⁾。

V 「主題(件名)分類法」の考案

書架の利用者への開放は、当然のこと、次なる問題の解決を求めている。書架上の図書の「排列」すなわち「分類体系」である。書架分類(図書館分類)とは、書架上に本を並べる方法である。そのため、一般的には、同種のテーマのものが同じ場所に集まって置かれること、大区分とその下位区分が論理的で分かりやすいこと、表記が単純であるほど良いとされる。メルヴィル・デュエイ(Melvil Dewey, 1851-1931)の「十進分類法」は、アラビア数字のみを使い、十進ですべてが処理でき、「分類番号」が「分かりやすく、使いやすい」と言われ、1876年のアメリカ図書館協会の図書館大会で発表されて以来、特にアメリカの公共図書館ではほとんどの場所で使われるようになっていた。ブラウンは、図書の主題が多くの領域にわたっていても書架上でまとめられるような体系を目指した。例えば「薔薇」は植物であろうが、香水であろうが、同一書架上にまとめておくことができないかと考えた。これは、先にエドワーズが自分の公共図書館で実践していた体系を参考としていた。

「主題分類法(Subject Classification)」と呼ばれるブラウンの体系は、アラビア数字10桁の

下位区分をどこまでも追求する「十進分類」とは異なり、むしろ、知識を十の分野に限定せず、テーマの基本区分を、ありうるかぎり広い範囲で設定している点で、チャールズ・カッター(Charles Cutter, 1837-1903)の『展開分類法(Expansive Classification)』および『議会図書館分類法(Library of Congress Classification)』の方向を指向していた。これが図書館の書架における排列に慣れていない一般市民の利用者にとって便利であると見なしたからである。「開架制」とあいまってブラウンが志向した公共図書館における書架の分類は、同じテーマをその領域にかかわらず集めて排架しておこうとするもので、その独自性は「カテゴリー表(Categorical Table)」と名付ける各大区分内に適用できる別表を多数用意するところにあった。ブラウンの「主題分類法」の解説は、クロイドン公共図書館の図書館長でロンドン大学では図書館分類法を教授していたウィリアム・バーウィック・セイヤーズ(William Berwick Sayers, 1881-1960)の『図書館分類マニュアル』で詳しく取りあげられている¹⁷⁾。

『主題分類法』は1906年に初版が刊行され、理論分類を重視するイギリスの図書館ではかなり広く普及した。その第二版は1914年に刊行されて、第三版の改訂にも取りかかっていたが、ブラウンの死後、この分類法は急速に人気を失っていった。その理由は、その後の改訂が進まなかったこと、および、「大ロンドン地区」での公共図書館の共通システム普及の時期に実務の責任者がいなかったことが原因とされている¹⁸⁾。

VI 雑誌『図書館世界』の編集

1898年7月、ブラウンは雑誌『図書館世界(Library World)』を創刊した¹⁹⁾。彼の意気込みのほどは創刊号の「序文(編集の辞)」(「資料I」を参照)に示されてあった。すなわち、既存のいずれの図書館関連の雑誌と異なる独自の方針により貫かれていた。そこには「いずれの特定の協会や公共団体との結びつき」の排除を宣

言していた。既存の団体とは、第一にイギリスの「図書館協会」であった。挑戦を意識していたのは明確であるが、さりとて、そこを攻撃目標としていたわけではない。対抗意識は若者たちの自然な精力の発露であって、彼らの活動の原動力となっていた。それが過剰な「自意識」でなかったことは当時のすべての同業者＝知識人に協力を呼びかけ、力を結集しようとしていた「第二」の雑誌の目的に現れていた。初号の寄稿者24名は、当時のイギリス図書館界の代表者とその立場を問わずに結集していた。これは単なる業界の「広報誌」ではなく、過去の経験と現代の知識の融合を呼びかける「野心的」な新たな企画の論集でもあった。新雑誌の編纂は、ブラウンが死去した1914年までのわずかであったが、この間に誌上に発表された文章は、図書館業務のあらゆる領域にわたっていた。

雑誌『図書館世界』の創刊には、単なる新たな機関誌の出現以上の意味があった。それは、新興の若い図書館長の活動を支え、彼らの士気を鼓舞していた。イギリスの図書館における各種のグループ活動の先駆けであり、これらの活動はさらには次の世代の「分類研究グループ」(1952年結成)、「図書館史グループ」(1962年結成)²⁰⁾などの図書館学研究活動へと引き継がれた。これらグループ活動のほとんどがロンドンを拠点としていた。そこが結集の場として至便であったことがまず推察できるが、『図書館世界』の場合にはさらにもう一つの理由が加わっていた。1890年代といえば「ヴィクトリア朝」の最盛期であって、「改革の時代」と呼ばれたヴィクトリア女王(Queen Victoria, 1819-1901)の「繁栄の治世」の最中であつた。若者たちが、19世紀前期とは異なる、社会の各方面に進出した時代であつたのであり、彼らのエネルギーが「発展」の動因であつたことは確かである。ともあれ、イギリスでは図書館活動がこの時代には大きな転機にさしかかっていた。

VII 「匿名図書館員クラブ」の活動

『図書館世界』第7号(1899)には「クラブの成立」という下記の記事が掲載されていた²¹⁾。

「図書館愛好クラブ」は、会員たちの交流と良き研究の推進のために設立された。クラブは、全体として状況に満足せず、公的に自分たち自身の進歩の遅れにも満足していない少数の図書館員から成り立っている。最初の会合は、全体の議長を自ら引きうけてくれた「古書人」の親身な世話があり、きわだった成功であつた。食事が良くて、重要な公的議題も論議された。「白の頭皮職人」による動議と「ごくつぶし」による支持を得て、「ロドニー石」、「モンテ・カルロ」その他も賛成し、「ロブ・ロイ」が団体の書記として選出された。規約は後に決められることとした。「提督」および「エオス神」の発議により議長への謝意が採択され、会合は散会した。このおそるべき組織の今後の動向に対して図書館員は身近な関心で見守るべきであろう。

こうした「匿名」の会員からなるこの「公共図書館員の会」は『図書館世界』を拠点として活動を続けた。上記の匿名の主は以下のとおりであつた²²⁾。

「古書人」	H・W・フィンチャム (クラーケンウェル図書館)
「白の頭皮職人」	A・W・ランバート (図書館コンサルタント)
「ごくつぶし」	L・S・ジャスト (クロイドン公共図書館)
「ロドニー石」	T・ジョンストン (ホーンセイ公共図書館)
「モンテ・カルロ」	W・W・フォーチュン (図書館用品供給会社)
「ロブ・ロイ」	J・D・ブラウン (クラーケンウェル公共図書館)
「提督」	B・カーター (キングストン・オン・テムズ公共図書館)

Mar. 2016

公共図書館活動の開拓者ジェームズ・ダフ・ブラウン

「エオス神」 T・アルドレッド
(サザーク公共図書館)

後に参加した主要会員には以下の人物がいた。

「ペヴェリル山頂」 E・A・ベイカー
「キリスト教徒」 B・ケトル
(ギルドホール図書館)

「古型人間」 F・T・バレット
(グラスゴー公共図書館)

「オシアン」 J・Y・W・マッカリスター
(図書館協会書記)

「日陰者ジュード」 G・E・ローバック
(ウォルサムストウ公共図書館)

この雑誌の寄稿者にはさらにW・B・セイヤーズがいた。L・R・マッコルヴィン (MacColvin, Lionel Roy, 1896-1976) も後ほど参加していた。もともと「公共図書館員の会」は当代の図書館長たちの機知と研究心の発露の場であったが、ブラウンは鋭敏な編集者であり、イギリスの「文人」の伝統を擁護したユーモアを解する知識人であった。「公共図書館員の会」は評論家としても著名であったH・G・ウェルズ (H. G. Wells, 1866-1946) を講演に招いていた。さらに、ブラウンがこの雑誌に掲載した「匿名家のニッケル・メッキのアフォリズム」には次のような「格言」すらあった²³⁾。

「分類できない本は、購入しないほうがよい」
「過ちがおこるのはそのほとんどの場合に助手がいないからだ」
「普通的手段で悪名を身につけることに飽きたら、図書館協会に入るとよい」

辛辣な「格言」ではあったが、「図書館の革新と会員相互の間の親睦を図ることを目的とする」この会の性格を見事に言い表した内容であった。

VIII 「イズリントン公共図書館」時代

ブラウンが、ロンドンの郊外であったイズリ

ントン地区の図書館長に転任したのは1905年であったが、この地区の5平方マイルにはすでに35万人が住んでいた。理事会は1904年に公共図書館の設立を可決しており、幸いにもカーネギー財団から4万ポンドの支援も決まっており、図書館界ですでに実績のあるブラウンが館長として選ばれていた。ここで彼は分館を含む図書館の設立に積極的に取り組んだ。彼がまず主張したのは雑誌閲覧室で、それは当時まだ珍しかった。さらに、彼は多数の女性図書館員の配置を主張したが、これは実現しなかった。「開架制」書架の北部分館が実現したのは1906年9月であったが、1万7000冊の蔵書はブラウンの「主題分類法」により整理されていた。登録者は最初の3週間で1万人(うち児童が2000名)という盛況であり、書架はじきに「空っぽ」になっていたという²⁴⁾。その後、中央図書館と西分館も完成して、イズリントン公共図書館は、職員数が33名、年度予算は7483ポンドで、その内訳は人件費が3095ポンド、書籍・雑誌購入費が1253ポンドという規模に達していた²⁵⁾。ブラウンは、イギリス公共図書館界を代表する顔となり、国内・国外から来訪する図書館員たちへの対応に追われていた。1908年にはベルギー政府からの招待があって、アントワープとブリュッセルを訪問し「国際書誌協会 (Institut International de Bibliographie)」のポール・オトレ (Paul Otlet, 1868-1944) とも面談していたが、ベルギーは、残念ながら時局の切迫にともない、公共図書館システムを改善する余地はなかった。国内の図書館ではL・S・ジャスト (Louis Stanley Jast, 1868-1944) が館長を務めるクロイドン公共図書館との相互協力が特に目立ち、両館は職員間の交換計画まで実現していた²⁶⁾。

IX イギリス図書館協会での活動

ブラウンが図書館協会の会員になったのは1884年からであったが、クラーケンウェル公共図書館に在職中、各地での図書館大会には必ず出席して、イギリスの代表的な図書館員と知り

合っており、彼自身の性格も相手に受け入れられていた。彼が協会の機関誌『図書館』の定期執筆者となったのは1890年からであった。イギリスの図書館協会は、アメリカに1年遅れて1877年に設立されており、500名の会員を擁していたが、予算がなく、当初はアメリカ図書館協会の機関誌に相乗りしていた。図書館協会の名誉書記ジョン・マッカリスターの個人的な努力と出版社の協力を得て、機関誌『図書館』が発行されるようになったのは1889年からであった。マッカリスターに直接依頼されたため、ブラウンは1890年から『図書館』の寄稿者となった。「王立医学協会」図書館長のマッカリスターは、1898年には図書館協会を王室勅許団体とした実力者であった²⁷⁾。しかし、ブラウンは同時に、トーマス・グリーンウッド(Thomas Greenwood, 1851-1908)の『イギリス図書館年報(British Library Year Book)』にも寄稿していた²⁸⁾。グリーンウッドは個人的にブラウンを高く評価しており、ブラウンも型にはまった媒体である『図書館』誌よりも自由に執筆できるグリーンウッドの『年報』のほうに快く協力していた。

ブラウンが晩年に発表したものに、ニュージージーランド図書館協会の図書館大会で1912年に読みあげられた「古型の国の図書館の状況」(「資料Ⅱ」参照)がある。ブラウンは、ニュージージーランド図書館協会の1912年ウェリントン大会に招かれていたが、病身のため出席できず、原稿を送っていた。この国の図書館協会は1910年に発足したばかりであり、1912年の大会で同会の名誉書記H・ベイリー(H. Baillie)が代読したこの講演を聞いていたのは20名の図書館員だけであった。大会関係の書類はその後の火災で消失して、原稿だけが残されていた。講演の内容は、標準化されすぎた新興国アメリカの図書館の実務内容を過度に取り入れることに反対するとともに、イギリス図書館協会をも批判していた。彼はエリートが支配する自国の図書館協会を必ずしも全面的に承認していたわけではなかった。

X ブラウンの影響力と没後の著作の刊行

1913年2月にブラウンは入院を余儀なくされ、再びイズリントン公共図書館の仕事に戻ることはなかった。同年10月には館長代理が任命された。雑誌『図書館世界』の編集はすでに甥のジェームズ・スチュアート(James Stewart, 1885-1965)に任せてあった。ブラウンの病名は「ブライト病」という腎臓の疾患であったが、当時、この病気の治療方法は解明されていなかった。2月24日、回復は無理だと悟って、カノンスバリーの自宅に移され、二日後に彼は死去した。51歳の若さであった²⁹⁾。遺骨はロンドンのニューサウスゲイトの「北部大墓地」に葬られた。『イズリントン・ガゼット』紙は次のような死亡記事を掲載した³⁰⁾。

「イズリントン公共図書館は全図書館世界のモデルとなっていた。わずか数か月前、クロイドン・バラの評議会は、世界のほぼすべての国の代表が、サービスの方法と施設を研究するためにこの図書館を訪問している事実注目すべきだと報告を提出していた。この国を訪れるどの外国からの図書館員も情報と支援を求めるのはほとんど常にブラウン氏に対してであり、彼の生まれつきの個性は、友人として、また図書館員として記憶される原因となっている」。

ブラウンに対する「心あふれる」回想は、彼の弟子にあたる後のエディンバラ公共図書館のアーネスト・サヴィジ(E. A. Savage, 1877-1966)が『一図書館員の回想』に書いており³¹⁾、イズリントン図書館時代の図書館員助手で、後にW・B・セイヤーズと結婚したオリヴ・クラーク(Olive Clarke)も次のように書いていた³²⁾。

「職員に対する先生として、ブラウン氏に匹敵する人は少ない。それは、部分的には彼の親切心からであり(ここで働く者すべ

て、および、ここにやってくる図書館員のすべてに対して)、部分的には、話し方を変えてまで技術的なことを親身に教えるやり方、あるいは、たとえ話を交えたその話し方によるのだと思います。こうして彼は巧みにテーマを自分のものとしており、教えてもらう者がそれを完全に覚えていられるのです」。

ブラウンの主著『図書館経営マニュアル』および『主題分類法』であった。前者はエドワード・エドワーズの『図書館の回想』(1859)の第二部の伝統に沿うものであり、図書館業務のすべてを把握しきった「専門家」にのみ書ける内容であった。ジョン・バリンジャー (John Ballinger, 1860-1933) は『図書館世界』の書評に書いていた、

「ブラウンの『マニュアル』は図書館員の職業教育に対して遅まきながら現れた最大の貢献となっており、それへの偏見およびそれへの基本的な貢献がなおも見え隠れしている」。

初版は1903年、第二版は1907年に刊行されていたが、その重要性への要望から、ブラウンの死後の1920年にW・B・セイヤーズが補訂第三版を刊行するまでとなっていた。

『主題分類法』のほうは、1906年に初版、1914年に第二版が出版されていた。ブラウンの影響を強く受けていたセイヤーズは『分類マニュアル』(1926)を刊行したさいに、ブラウンの「主題分類法」を大きく取りあげていた³³⁾。

XI ブラウンの図書館活動の時代的背景

ブラウンが活動した時代の前半にあたる1900年頃までは、ヴィクトリア女王治世下の「改革の時代³⁴⁾」と呼ばれており、後半の「エドワード朝」もその余波のうちにあった。改革をもたらした要因は多々ある。第一に、人口の増

加があった。1801年に1094万人であったイングランド、ウェールズ、スコットランドの人口は、1821年に1439万人、1831年までに1654万人となっていた³⁵⁾。19世紀の半ば以降には、アイルランドからの難民が押し寄せていたし、人種差別と政治不安から東欧と南欧からの移民が増えていた。18世紀後半の「産業革命」とナポレオン軍への勝利により、イギリスは難民たちにとって「繁栄」の土地となっていた。確かに、北部の繊維産業の勃興、それを受けての貿易・金融立国に向けての政策はイギリスを「大英帝国」の地としていた。「改革」のうちで最も顕著なものが社会・教育分野に対してであった。いくつかの「王立委員会」による勧告は国内の教育事情と国民の生活を根本から変えていた。初等教育(「淑女学校」から「日曜学校」へ)、中等教育(「グラマー・スクール」での数学や近代語の重視)、高等教育(オックス・ブリッジおよび新設のロンドン大学での非アングリカン教徒の受け入れ)、女子高等教育の普及(女子カレッジの創設)、生涯教育(職工階級と一般市民への識字教育の普及)は目覚ましかった³⁶⁾。特筆すべき帰結点は、1870年の「初等教育法」の通過であって、これにより19世紀の末には、例えば女性の識字率が90%を超える、他国に類を見ない状況をもたらしていた³⁷⁾。1832年から1884年にかけての三度にわたる「選挙権改正」により、中産階級の政治意識を変えていた。こうした状況は、出版の動向と市民の読書にも示されていた。出版事業は盛況であり、特に19世紀後半から20世紀前半にかけては児童文学にも大きな影響を与えていた。この時期は児童文学の「黄金時代」と言われている。『たのしい川べ』、『クマのプーさん』、『ピーターパン』、『ピーター・ラビット』など現在に至るも読み継がれる作品が次々と刊行されていたからである³⁸⁾。1842年に設立されたチャールズ・ミューディの「選定図書館」といった名称の「貸本屋」はベストセラーを市民に安価で提供して成功し、こうした店舗の普及はイギリス全土に広がっていた。

こうした状況が公共図書館の普及に影響し

ないはずはなかった。ブラウンをはじめとする理想に燃えた若き図書館長たちは、イギリス社会が1851年の「第一回万国博覧会」開催以降の繁栄に向かう過渡期に現れていた。1871年から1883年に至る各都市の公共図書館数は、前述したそれ以前の時期に比べて格段の相違がみられた。1880年から1889年までに70の自治体が、1890年から1899年までには新たに161の自治体が『公共図書館法』を採択していた³⁹⁾。こうした状況のなかで、ブラウンは理想に燃えた活動家でありながら、保守的な立場も堅持していた。確かに、ブラウンに対する若き図書館長たちの間での人気は、その人柄とカリスマ性によるところが大きかったが、彼の内部では別の意識も働いていた。急激な高度成長といった変動の時代は「ひずみ」をも生んでいたからである。ウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)⁴⁰⁾の指摘を待つまでもなく、産業革命はイギリスの田園の様相を変えていた。自然環境の破壊はすでに市民の精神生活にも影響をもたらしており、読書によるそれへの認識は急務であった。加えて「ヴィクトリア朝」を支えてきたアングリカン教会を中心とする穏健な信仰と社会的モラルは、宗教不信の近代意識により崩れようとしていた。ブラウンは市民に対する「開かれた読書の場」の提供をつうじて、読書による啓蒙を支えたのである。

敬虔な宗教人の母親の影響による「秩序」に対するブラウンの意識下の葛藤は、他の面にも現れていた。それは新興国アメリカのプラグマティズムに対する不信であった。自らの姓をも簡略化しようとする、十進分類法の考案者メルヴィル・デュエイの思想⁴¹⁾は、保守思想家であるブラウンには到底受け入れられないものであったことであろう。

〔付 記〕

本稿は2015年度阪南大学産業経済研究所助成研究(C)「イギリス図書館思想の研究」における研究成果の一部である。

【資料 I】『図書館世界』創刊号(vol. 1, no. 1, July, 1898, p. 1-2.)の「序文」(翻訳)

きわめて長い期間にわたり、図書館員と図書館当局は、近代図書館の業務とその発展との局面を正確かつ体系的に反映させようとする雑誌の創刊を求めていた。こうした要求は、これまでに発行されてきた雑誌のいずれよりも独立しており、特定の協会とか公共団体との結びつきにより阻害されることのまったくない雑誌への要望であった。

このような広い範囲の要求を満たすべく『図書館世界』は創刊されることになるので、徹底した非公的な方針で刊行されることとなるであろう。その第一の目的は、図書館員たちと読者諸氏の双方にとって関心のあるニュースや論文を定期的に継続して提供することである。もう一つの目的は、最良の知識を有する書き手から「図書館実務」のいっそう進んだ状況を現実的に引き出そうとしている。それは全体的に関心のある主題の議論のため常に開かれるであろう。

「図書館経営(Library Economy)」の重要な部分についての歴史のおよび記述的な一連の論文も提供する用意がある。その他の記事としては、図書館員と読者諸氏が利用と案内を求めている専門家により選定され解説を付される様々なテーマの選定図書リストがあり、諸外国とアメリカおよび植民地諸国のニュース、国内全体の図書館の動向の全般的概況についても取りあげるであろう。

書誌・印刷・製本といったトピックをも忘れることなく、『図書館世界』は、現状の早急なニーズに捧げられる実務雑誌であることを本質とし、その主たる努力は図書館活動のあらゆる部局の効率を改善し、図書館員と公衆との間のいっそう親密で有益な関係を養うことに向けられることになろう。

本誌は野心的な計画かもしれないが、本誌の推進者たちの意見は、完成のための活発な努力に値するものと見なしている。必要性だけでなく、『図書館世界』のような方向の雑誌は存在する余地があるから、図書館員たちとその友人た

ちのしかるべき支援と激励が得られるならば、この雑誌を現存の他のいかなるものよりも網羅的、教育的、かつ、楽しめるものとする努力は惜しまないであろう。

【資料Ⅱ】「古型の国の図書館の状況」(ニュージージーランド図書館協会のウェリントン大会での講演, 1912年1月22日*) (翻訳)

デュネディンのマックイーワン氏があなた方の年次図書館大会に向けて書くよう、わたしに求めた事実は、連合王国のいささかの図書館の現状についての、以下のいくつかの散漫な感想にとって言い訳となるに違いない。こうした条件は、それがいずれの時代であろうが、進歩と停滞との双方を可能にしがちであり、ニュージージーランドに対する客観的な教訓は、「古型の国」のものであり、あるいはアメリカから停滞のほうを真似るのを避けるようにすることだと考える。アメリカの方法をほとんど異議なく採択しようとするニュージージーランドの傾向は、過度に進められるのでなければ、まことに称賛すべきものに思える。ニュージージーランドは、アメリカの方法とその根底にある思想を最良のものとして文句なく受け入れているように見える。規格化されたアメリカの図書館経営の方法は、効率の程度を引きあげようが、少なくとも全般的な陳腐化をもたらす。「古型の国」にはこうした向上の方針は何ら見当たらない。30年か40年以前の古型のやり方のままか、もしくはきわめて近代的な進歩の路線に沿っていて、どこにありとも、公共図書館サービスに効率は求めない。規格化は可も不可もない割合で、ある程度は行き渡るが、将来的な進歩は滞りがちになる……過去20年のアメリカの図書館は、全般的な実務においては改善が何もなかった。いずれの州でも、デューイの分類法の単調さからほとんど逃れられず、カード貸出システムや職員管理方法や辞書体目録に異議すら申し立てられず、「古型の国」ではどの部門でも改善されうような政策に関する質問もあげえなかった。こうした改善が散発的であるのは確かだが、それ

でも存在しており、将来に向けての改良の方向を指し示している。標準化がどのような停滞をもたらすかを「古型の国」の図書館実務の歴史から見てとるために、一・二の例に触れておくのが良いであろう。1878-79年の頃、図書館協会評議会は貸出図書館で利用する「表示板」の全面的な採用を推薦する決議をした。その結果、図書館は次から次へとこの装置を図書貸出の唯一の方法として採用した。それは発明の才を完全に麻痺させ、イギリスの公共図書館の大多数が現在、一般の利用者にとって邪魔であり「呪いの種」のこの煩わしい装置になおも苦しめられている。それは正確な分類の採用を妨げるし、印刷した辞書体目録をほとんど無意味にしている。型にはまったその他の同様の例が時おり図書館管理を束縛に陥れ、この開花した時代に、「古型の国」の地方の多くの図書館では、なおもこの装置や公共サービスのうえでのなげかわしい状況を招いている。こうした図書館は、はるかに流動的な方法を採用することで、学問と満足を求める公衆のニーズに沿うことができる。旧態然とした「事なかれ主義」で「あなた任せ」の束縛から抜け出すことができるからである。何年も何年も「表示板を使うべきだ」「辞書体印刷目録を持たねばならない」、さらに、a, b, c, 1, 2, 3の(序列を重んじる)分類法を利用すべきだとの叫びがあがっており、こうした便宜的な手段に挑戦する勇気も、率先性すら誰も持たなかった。1892-93年の「開架制」論争でようやく進展が見えてきたが、比較的些細なこの改善も、不当な紹介や臆病心からの反対の波に飲み込まれていた。こうした状況は、ゆっくりと、しかし確実に、過去の十年間に改善され、正確な分類を採用しようとの変化、および、図書館を現代的に変えようとする啓蒙的な委員会メンバーの行動という二つの要因により改善されつつある。通常、行われるのは以下のことであろう。観察眼のある図書館議長か委員会メンバーがロンドンか他の町に行き、進歩的な図書館の事例を目にし、みじめで古風な図書館と、現代的な精神で活気づき市民からの要求にすべ

て平等に応じている施設とを比較する。対比は当然のこと認識を生み、他の委員会の委員との議論と気の進まぬ図書館長に対しての近代的な勉強を強いることになり、結果として、方法を完全に変えようとの委員会の要求が実現される。これが実現した多くの場合、結果は素晴らしいもので、古型で停滞していた不備の図書館の多くが、新たな生命を得て、これまでに受けたことのないような市民からの称賛を持つことになる。

こうした教訓は、「古型の国」の最良の実務が真に意味しているものを無視して、アメリカの画一的なシステムを向こう見ずに大急ぎで採用することに対する、ニュージーランド図書館協会に向けた一つの警告である。アメリカの図書館が、全体とすれば、同様な条件のもとではイギリスの図書館よりも優れていると直ちに認める者はいるであろうが、しかし、他方では、財政の規制にもかかわらず、最良のイギリスの図書館のほとんどは、全体として、平均的なアメリカの図書館よりもはるかに立派な仕事をしていることは疑いえないし、これがニュージーランド図書館協会に注目してもらいたい指摘の一つである。ここ何年かの停滞が続いて、十分な活動が妨げられたのがおそらく不幸であったが、それはしかし、イギリス図書館協会の歴史のなかではありえた要素であって、この停滞が図書館協会当局に影響したばかりでなく、協会の活動にすらおよび、何年となくそこは実際に、図書館界に対して何もせず、会員自体も何もしなかった。事実、この数年、図書館協会は、学問を偽装したビジネスの方向に走っており、反動的影響をもたらして、良い結果をもたらさそうにない。代表にふさわしい多くの会員を引き入れる根気のいる試みはなされず、年次大会で読みあげられる論文は、ここ数年のところ初歩的でいずれもが平凡であって、理事会の方針は、国内全体の様々な図書館の状態にまったく無知な人たちに支配され決定されている。彼らは真の代表ではない。地方の会員たちはロンドンの会議に出席できないからであり、彼らは

自己満足の眼鏡でものを見つめ、国の図書館員を代表する視点に欠けている。こうした方針の一つの結果として、図書館協会は次第に萎縮し会員数と影響力を減退しており、結果として、1898年にマッカリスター氏が書記職を引退して以来、協会は国内で最も影響力の乏しい団体となっている。これは明らかに規格化が招いた停滞の一例であって、精力にあふれ力強く成功をとげている「図書館助手協会」と、唯一の主張が無邪気な読者に向けた誰にも読まれない無味乾燥な図書館雑誌の刊行である「図書館協会」ほど、対照的な二つの存在はありえない。

一般的には「古型の国」の図書館は二つのグループに分けられると言いうる。1870年かそれ以前の頃からほとんど変わらなかった図書館と、カーネギーの寄付が原因で施設全体を再編した図書館である。この後者と並んで、「公共図書館法」のもとで最近に至り設立された何館かであるが、そこには、不幸にも最善の結果を得られなかったが、ほとんどが1870年の理想に戻って近代的なモデルを採用している図書館が加わっている。ニュージーランドにとって良いと信じられる将来性ある特徴は、訓練を経た図書館助手と館長とを任命することであろう。この方向が貫かれるなら、最終的には停滞する図書館をすべて排除し、仕事を現実に沿ったものとし、公衆の利用を拡大させるであろう。公共図書館への税率を拡大する方向が望めない以上、職員の教育的資質と資格を高めるのには、これ以上の有益な助言はない。過去何年かにわたって「法案」が出たり引っこんだりしているが、主として図書館協会の無関心さと審議会の一方的な態度によって何らかの効果的な結果は得られていないし、「法案」が現在の推進者たちの手中にあっては何も生まれないであろう。いずれの議会でも地方の租税割合の増額に同意させるのはきわめて困難であろう。妥当な法的措置を確保するには障壁が多すぎるのである。わが国の古型の図書館の多くに関しては、オーストラリアやニュージーランドの素朴な未開の図書館と同様に、改良した方法が必要とされてお

り、これまで以上に国際的な精神で様々な問題について考慮することが求められるであろう。植民地とイギリスの図書館が出合って図書館問題を討議する機会は少なく、時間的に間遠であったが、いずれの時に、すべてのイギリスの図書館にとっても便利な場所で、会合が開かれ、連合王国のあらゆる国の図書館事情の討議ができるならば良いであろう。

ニュージーランドの会員制図書館と課税レイト(税金)で支えられた「古型の国」の図書館との主たる相違は、植民地図書館全体にあっては政府からの拠出が主要な要素であるのに対し、イギリスの図書館にはそれがまったくない点である。連合王国の政府は、自治体の図書館をすっかり無視しているし、あらゆる形態と種類の図書館を、自分自身の部局に存在している図書館に対してすら軽視している。各種国家機関における図書館員の任命にあっても、ここでは図書館協会の職務資格や免許状すら認めていない。

要約するなら、「古型の国」の図書館業務は、財政上の制限と議会の全体としての無関心に妨げられているとはいえ、それでも、まったく望みなしではない。大多数の進んだ近代的な図書館により、きわめて見事な結果が実現されているし、図書館長や図書館職員に採用された者たちからの職業資格に対する主張のすべては、将来の大きな改革を指し示している。

停滞している図書館はおそらく一つ一つが消えゆくであろうし、画一化した方法と財政上の障害が課している限界は、何時の日か、いずれはすぐにも、消え去るであろう。ニュージーランド図書館協会は、近い将来には、内部の障害から脱して、多くの災いを避けられるような体験を示してくれるであろう。それこそがいずれの職業も職業団体も永遠に求めている途なのである。

J. D. BROWN

*Munford, W. A., *James Duff Brown 1862-1912*, London, Library Association, 1968, p. 91-95 (Appendix). をもとに翻訳(一部省略あり)

注

- 1) ウィリアム・マンフォード著、藤野寛之訳『エドワード・エドワーズ ある図書館員の肖像 1812-86』金沢文圃閣、2008、87、149ページ。
- 2) Mechanics' Institution (或いはMechanics' Institute), 「職工学校」, 「職工講習所」, 「メカニクス・インスティテュート」などの訳語がある。
- 3) コーヒーハウスとは、コーヒーを飲みながら、新聞や雑誌を読んだり、時には政治論議をしたりする場。コーヒーハウスについては『コーヒー・ハウス: 18世紀ロンドン、都市の生活史』(小林章夫著、講談社、2000)が詳しい。
- 4) 諏訪敏幸「サミュエル・グリーン」の「民衆図書館」: 1876年論文の28事例から見えるもの』『情報化社会・メディア研究』vol. 3, 2006, 89ページ。
- 5) Munford, W. A., *A History of the Library Association*, London: Library Association, 1976, p. 40-41.
- 6) Manley, K. A., *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford: Oxford University Press, 2004, vol. 8, p. 60.
- 7) Munford, W. A., *James Duff Brown 1862-1914*, London: Library Association, 1968, p. 1.
- 8) S・スマイルズ著、竹内均訳『自助論』三笠書房、2002を参照のこと。
- 9) スコットランド・ルネッサンスとは、18世紀後半のスコットランドのエディンバラを中心に展開された文芸復興運動を表現した言葉。スコットランド・ルネッサンスについては『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の反映』(北政巳著、藤原書店、2003)が詳しい。
- 10) Manley, K. A., *op. cit.*, p. 61.
- 11) イギリスの公共図書館運動の先駆者であり、1850年の「公共図書館法」成立に寄与した人物。「公共図書館の父」と呼ばれる。Munford, W. A., *Edward Edwards 1812-86*, London: Library Association, 1963. (藤野寛之訳『エドワード・エドワーズ ある図書館員の肖像 1812-86』金沢文圃閣、2008、1-275ページ)を参照のこと。
- 12) ブラウンは1903年に図書館業務全体を取りあげた『図書館経営マニュアル (*Manual of Library Economy*)』を執筆している。『図書館経営マニュアル』はエドワーズの『図書館の回想』以来の「公共図書館についての実践的な書」であった。
- 13) *Private Lives of the Great Composers* (J. F. Rowbotham)。ブラウンはこのなかで、各章末の参考文献の責任を引き受けていた。
- 14) Brown, J. D., *Open Access Libraries*, London: Library Association, 1915, p. 30.
- 15) コトグリーヴの「表示板」の概要については次の文献を参照のこと、T・ケリー、E・ケリー著、原

- 田勝, 常盤繁訳『イギリスの公共図書館』東京大学出版会, 1983, 113-115ページ。
- 16) Munford, W. A., *James Duff Brown, op. cit.*, p. 41-42.
- 17) Sayers, W. C. B., *A Manual of Classification for Librarians & Bibliographers*, 3rd ed., London: Grafton, 1955, 346p.
- 18) Munford, W. A., *James Duff Brown, op. cit.*, p. 71.
- 19) *Library World*, vol. 1, no. 1, 1898, 53p.
- 20) Classification Research Group (Vickery, Foskett, etc.): Library History Group.
- 21) *Library World*, vol. 2, no. 7, 1899, p. 130.
- 22) Munford, W. A., *James Duff Brown, op. cit.*, p. 56-57. 主なメンバーは次のとおり, H. W. Fincham; L. S. Jast; T. Johnston; W. W. Fortune; J. D. Brown; B. Carter; T. Aldred; E. A. Baker; B. Kettle; F. T. Barrett; J. Y. W. MacAlister; G. E. Roebuck.
- 23) Munford, W. A., *James Duff Brown, op. cit.*, p. 58.
- 24) Munford, W. A., *James Duff Brown, op. cit.*, p. 73.
- 25) Munford, W. A., *James Duff Brown, op. cit.*, p. 81.
- 26) Fry, W. G. and Munford, W. A., *Louis Stanley Jast: A Biographical Sketch*, London: Library Association, 1966, 79p. を参照のこと。
- 27) 図書館協会に対するマッカリスターの貢献は次の文献を参照のこと, Munford, W. A., *A History of the Library Association*, London: Library Association, 1976, p. 67-120.
- 28) Munford, W. A., *James Duff Brown, op. cit.*, p. 40.
- 29) Manley, K. A., *op. cit.*, p. 61.
- 30) Munford, W. A., *James Duff Brown, op. cit.*, p. 89.
- 31) Savage, E. A., *A Librarian's Memories: Portraits and Reflections*, London: Grafton, 1952, p. 149-176.
- 32) Munford, W. A., *James Duff Brown, op. cit.*, p. 80.
- 33) Sayers, W. C. B., *A Manual of Classification for Librarians & Bibliographers*, London: Grafton, 1926, 345p.
- 34) WoodWard, Llewellyn, *The Age of Reform*, 2nd ed., London: Clarendon Press, 1962, 681p.
- 35) Wilson, A. N., *The Victorians*, London: W. W. Norton & Co., 2002, p. 11.
- 36) Adamson, J. W., *English Education 1789-1902*, Cambridge: Cambridge University Press, 1930, 519p.
- 37) Porter, G. R., *The Progress of the Nation in Its Various Social and Economic Relations from the Beginning of the Nineteenth Century*, New ed., London: Methuen, 1912, p. 147.
- 38) 藤野寛之「イギリス児童ファンタジー文学の黄金時代：その作家・作品と時代背景」『阪南論集 人文・自然科学編』, 49 (2), 阪南大学学会, 2014, 1-12ページ。
- 39) ウィリアム・マンフォード著, 藤野寛之訳『エドワード・エドワーズ ある図書館員の肖像 1812-86』金沢文圃閣, 2008, 176ページ, ならびに, ウィリアム・マンフォード著, 藤野寛之訳『ペニー・レイト：イギリス公共図書館史の諸相 1850-1950』金沢文圃閣, 2007, 50-51ページ。
- 40) ウィリアム・モリスについては次の論考を参考のこと, 藤野寛之「改革者ウィリアム・モリス (William Morris) 再考」『発達社会学研究』第6号, 2014, 25-32ページ。
- 41) ウェイン・A・ウィーガン著, 川崎良孝, 村上加代子訳『手に負えない改革者：メルヴィル・デュエーイの生涯』京都大学図書館情報学研究会, 2004, 26ページ。
- その他, 本稿執筆のために次の文献を参考にした。
- “Obituary” *Library Association Record*, 16, London: Library Association, 1914, p. 239-263.
- “The Duff Brown days. .” *Library + Information Update*, vol. 4 (4), London: CILIP, 2005, p. 22.
- Altick, Richard D., *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900*, 2nd ed., Columbus: Ohio State University Press, 1998, 448p.
- Foskett, D. J. and Palmer, B. I. ed., *Sayers Memorial Volume: Essays in Librarianship in Memory of William Charles Berwick Sayers*, London: Library Association, 1961, 218p.
- Godbolt, Shane and Munford, W. A., *The Incomparable Mac: A Biographical Study of Sir John Young Walker MacAlister (1856-1925)*, London: Library Association, 1983, 142p.
- Kent, Allen and others, *Encyclopedia of Library and Information Science*, New York: Marcel Dekker, 1970, vol. 3, p. 371-378.
- Munford, W. A., “James Duff Brown” *Who Was Who in British Librarianship 1800-1985*, London: Library Association, 1987, p. 9.
- Munford, W. A., *William Ewart, M.P., 1798-1869: Portrait of a Radical*, London: Grafton, 1960, 208p.
- Wiegand, Wayne A. and Davis, Donald G. ed., *Encyclopedia of Library History*, London: Garland Pub., 1994, 707p.
- アリステア・ブラック著, 藤野寛之訳『新・イギリス公共図書館史：社会的・知的文脈 1850-1914』日外アソシエーツ, 2011, 1-501ページ。
- エヴゲーニー・シャムーリン著, 藤野幸雄, 宮島太郎訳『図書館分類 = 書誌分類の歴史 第2巻』金沢

Mar. 2016

公共図書館活動の開拓者ジェームズ・ダフ・ブラウン

文圃閣, 2007, 1-618 ページ。

藤野幸雄, 藤野寛之『図書館を育てた人々 イギリス
篇』日本図書館協会, 2007, 1-285 ページ。

(2015年11月20日掲載決定)